

農林振興課

園 林務水産係(506)

誰かのために共に生きる社会に

— 協働活動生みだす「関係づくり」 —



慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科研究員
鹿兒島大学グローバルセンター客員研究員
大崎町役場政策研究員

田中 力

人と竹の共生関係築く

秋〜冬明けまでの毎週木曜日の午前、鹿兒島県大崎町では竹林整備がおこなわれてきた。誰が参加してもいい、どんな作業をしてもいい、何もしなくてもいい、ただ居てよい空間がある。竹林整備をとおしたコミュニティケーション、いつもと変わらぬ日常の中で共通の時間を過ごす、特別なことはない、会話がなくてもいい、ただ周りの人の息遣いにほっとする、そんな時間を大事にしてきた。

この取り組みは、放置竹林の拡大防止と竹材の利用促進、障がい者や高齢者の就業促進を目的として、障がい者や高齢者が放置竹林の整備や竹材加工の担い手となるコミュニティモデルの開発・実践をおこなったものである。障害者就労支援施設、地元住民、地元企業等の連携により、竹林整備、竹材炭化、土

壌改良材として圃場への竹炭散布、サツマイモ栽培、食品加工(干し芋)、販売を実践した。私自身が聴覚障がい者であり、「自らが障害福祉サービスを受けていても、最後まで人のために役立つことができる就業の仕組みをつくりたい」という思いで取り組んでいる。3年間で計92日184時間、延べ1342名が参加し、3027平方メートルの竹林を解消した。利用者工賃は全国平均の時給約240円に対し、当該作業に限り時給600円に向上し、サツマイモの収益性は通常1キロ100円

のところ、初年度711円まで改善。特産品「愛生会の干し芋」として販売され、経済的・社会的価値を生み出している。

「弱さ」を「強さ」に編集

我が国では、2065年頃には現役世代1:3人で高齢者1人を支える肩車型社会になると言われている。高齢化社会が深まるということは、誰でも障がい者の立場になりうることを意味する。私にとって「生きやすい」とは、「読唇しやすいようにマスクを外してくれる」「大きな声でゆっくり話してくれる」などである。「お互いが迷惑をかけあうことに抵抗感がない」社会が「生きやすい」ということにつながるのではないだろうか。

私は、共通の作業をすること、が相互理解につながると考えている。誰にでも「弱さ」はある。聞こえない、体が動きにくい、コミュニティケーションが苦手など実に多様である。竹林整備という

共通の仕事で、相手の「弱さ」が自然と見えてくる。弱さをお互いが知り、お互いができることをやる。作業の細分化等の工夫により、弱さを「強さ」に編集しなおすコミュニティが生まれる。ひとりではできなかった、ふたりならできる。誰もが誰かのために、共に生きる——そんな状況が自然と生まれてきている。

共生社会を目指して

障がい者や高齢者が放置竹林の整備や竹材加工の担い手となるコミュニティモデルは、放置竹林の拡大防止だけでなく、働く機会の創出、生きがいづくり、社会参加の空間をも生みだしている。この取り組みを契機として、支援者と利用者といった一方的な関係性ではなく、社会的背景の異なる人と人が支え合うつながりが大崎町において再構築されたのではないだろうか。大崎町における「誰ひとり取り残さない地域づくり」が、これからの社会へのヒントとなれば幸いである。誰もが生きやすい共生社会を目指して、今後も取り組みを続けていきたい。



特産品「愛生会の干し芋」



障がい者・高齢者による竹林整備